

氏 名	橘 しづえ
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人 23 号
学位授与年月日	2020（令和 2）年 9 月 24 日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第 3 条第 3 項第 1 号
学位論文題目	富田幸次郎研究—日米文化交流における役割— Kojiro Tomita and His Role in the Japan - U.S. Cultural Exchange
論文審査委員	主査 教授 小檜山 ルイ 副査 教授 茂木 敏夫 副査 東京大学名誉教授 油井 大三郎 副査 東京大学教授 遠藤 泰生

## 内容の要旨および審査の結果の要旨

### I. 論文内容の要旨

富田幸次郎（1890～1976）は東洋美術コレクションで名高い、米国ボストン美術館のアジア部長を 32 年間（1931～1963）勤めた人物である。本論文は、富田幸次郎の生涯をたどり、20 世紀前半の日米間の緊張を背景に、日米の文化交流における富田の働きを明らかにした。富田幸次郎についてのまとまった研究はこれまでになく、日米関係史、文化交渉史において重要な役割を果たした人物について新たな知見を開く研究である。

### II. 審査の結果の要旨

#### 1. 論文の構成

第 1 章は、高名な蒔絵師であり、後に京都市立美術工芸学校教授となった富田幸次郎の父、富田幸七（1854～1910）の生涯と経歴を辿る。京都の伝統的蒔絵職人とその社会

が明治維新以降の激動の時代にどのように向き合ったかを明らかにした。

第2章は、蒔絵師の家に生まれ育った富田幸次郎が京都市立美術工芸学校卒業後、16歳で農商務省海外実業練習生としてボストンに赴くまでは扱い、第1章を踏まえて、幸次郎がアメリカ行きを決めた理由を明らかにしている。

第3章は、1906年、海外で人気のあった漆工芸品の販路拡大と西洋塗料の調査を任務として農商務省からボストンに派遣された富田幸次郎が、任務をこなしながら、生涯の師父ともいべきボストン美術館中国・日本部長であった岡倉覚三、妻となるハリエット・ディッキンソン、イザベラ・ガードナー等と出会った様子を描く。幸次郎がボストン美術館で働くことになった経緯と幸次郎が得たボストン人脈を明らかにする。

第4章は、1929年に、富田幸次郎と源氏物語の英訳で当時名高かった大英博物館学芸員アーサー・ウェイリーとの間で交わされた司馬江漢の落款をめぐる論争を紹介している。富田はウェイリーの日本語や漢字に対する未熟さから出た誤謬を指摘し、欧米浮世絵愛好家たちに正しい情報を提供した。ウェイリーを論駁したことで富田幸次郎の東洋美術鑑定家としての評価は固まった。

第5章は、富田幸次郎が1931年に岡倉以来2人目の日本人キュレーター（アジア部部长）に就任するまでの経緯を初代のフェノロサから振り返った上で、就任後に富田がボストン美術館コレクションに加えた貴重な美術品を紹介する。1932年に富田が『吉備大臣入唐絵詞』を購入したことは、日本において批判され、「重要美術品等ノ保存ニ関スル法律」の制定のきっかけとなった。本章は、その顛末について詳述している。

第6章は、1936年に富田幸次郎が深く関わって開催され、大成功に終わった「ボストン日本古美術展覧会」の一部始終を追い、悪化の一途を辿る日米関係の中で払われた友好関係維持の努力の一端を明らかにした。

終章は、太平洋戦争中に強制送還されなかった富田が、ボストン美術館所蔵の重要な日本古美術を疎開させて安全を図り、また、ロバーツ委員会のメンバーとして『ウォーナー・リスト』作成に関与し、京都、奈良等の文化財を爆撃から守ることに腐心したことについて検討している。

## 2. 論文の特徴

本論文の特徴は、新しい一次資料を用いて、これまでほとんど研究されたことはなかったが、ボストン美術館東洋美術コレクションの充実、20世紀前半の日米文化交流史

において重要な役割を果たした富田幸次郎の生涯と事蹟を明らかにしたところにある。ボストン美術館初期におけるアーネスト・フェノロサ、岡倉天心の貢献は良く知られているが、その後を継いで30年以上にわたり美術館で地道に重責を担った富田は、この美術館のアジア・コレクションをして今日の姿たらしめる上で、先達以上の働きをしたと言える。その功績は、富田がアメリカ学術団体評議会（ACLS）の日本委員会の創立時のメンバーに選ばれたことや、退職後ボストン美術館アジア部の名誉キュレーターに任命されたことなどから、その時代のアメリカで明確に認知されたものだったと言える。しかし、今日のアメリカや日本で富田幸次郎を知る者はほとんどいない。

本論文の依拠する主な一次資料は、1) 京都在住の富田幸次郎の親族が提供した資料群、2) 富田幸次郎の妻ハリエットがマサチューセッツ州ダックスベリのアート・コンプレックス・ミュージアム（ACM）に寄贈した富田幸次郎資料、3) イザベラ・S・ガードナー美術館が所蔵する富田幸次郎関連書簡、4) 茨城県天心記念五浦美術館、茨城大学五浦美術文化研究所、茨城大学図書館が所蔵する、岡倉天心関連資料（その一部は富田幸次郎が寄贈）、5) ボストン美術館の紀要等に富田が寄稿した論文等である。特に1)と2)は、これまで未公開だったもので、論文執筆者が長年にわたり人間関係を構築しながら資料探索の努力を重ねた結果、閲覧と使用が可能となった貴重なものである。1)は富田幸次郎の父親富田幸七の自筆履歴書を含み、幕末に生まれた京都の蒔絵師の経歴とその世界を明らかにする。2)は富田幸次郎の家族宛の書簡や手稿を含み、農商務省の海外実業練習生時代の富田の様子等、得難い情報を提供している。

一次資料から論文筆者が作成した富田幸七と富田幸次郎の年譜、幸次郎著作目録は、幕末から第二次世界大戦終結に至るまでの日米文化交流史研究、日米知的交流研究、ボストン美術館研究、あるいは、ボストン文化史研究等において、今後基礎資料としての活用が期待される成果である。

### 3. 論文の評価

本論文執筆者は、長年華道、茶道の師範として日本の伝統文化に関わった経験を土台に、ボストン美術館のアジア・コレクションに関心を持ち、このコレクションの充実に寄与した富田幸次郎に着目するに至った。その問題意識は、「富田幸次郎がどのような人物で、どのような仕事をした人であるかを明らかにしたい」という、極めて単純なものである。富田幸次郎の父幸七の人生に始まる本論文は、富田幸次郎の人生を時間順に

辿るもので、筆者の単純明快な問題意識を素直に展開したものとなっている。

富田幸次郎の人生と仕事を記述するにあたり、論文執筆者は上に挙げた新しい一次資料の収集・参照し、これまで広く知られることのなかった富田の経歴と功績を明らかにした。その意味で、本論文には博士論文に十分な独創性を備えている。富田幸次郎に関する研究に限れば、先行研究は極めて少なく、それらは十分ふまえられている。論旨展開は、問題設定が単純なこともあり、明快で、わかりにくいところはほぼない。一次資料に基づく個々の事実については、その正確性について第3者が確かめられるよう、ていねいに典拠注がついている。独特の語り口を持つ文章は、読者を対象への関心に誘ううえで、十分な効果を発揮している。

一方で、博士論文の通例に違わず、本論文にも指摘すべき欠点はある。まず、上述の問題設定の単純さである。論文執筆者が一次資料に基づき抱いた富田幸次郎のイメージは、京都の高名な蒔絵師で京都市立美術工芸学校教授を勤めた父親富田幸七の庇護のもと、「ぼんぼん」として何不自由なく育ち、ボストンに渡って後も、育ちの良さから来るおおらかさを以て、日米のギャップを難なくやり過ごしたコスモポリタン、勤勉で優秀な信頼に足るアーキヴィストで、困難な時代にあって、日米の文化交流の継続に尽力した人、というものである。この人間像は、論文を通じよく描かれているし、資料的裏付けも十分である。だが、論文の読後に残るのは、それだけだったのか、という疑問である。

論文執筆者には、より広い枠組みの中に富田幸次郎を置き、その枠組みを以て彼の人生や仕事を眺めてみるという作業が欠けている。たとえば、論文執筆者にとって最も取り組み易いと考えられるボストン美術館史という枠組みに富田を置き、アジア部を他の地域のコレクションとの比較のうちに置いたとき、富田の仕事はどのように見えるだろうか。または、アジア部において、フェノロサ、岡倉、富田はそれぞれどのように異なる役割を果たし、それぞれの貢献はボストン美術館にとってどのように異なっていたのだろうか。または、さらに枠組みを広く取り、そもそもアメリカにおいてアジアの美術品を集めて展示する美術館というものがコロニアルな欲望を内包するとするなら、日本を故郷とする富田はその欲望にどう向き合ったのだろうか。

枠組みを広く設定すれば、当然先行研究の範囲は広がり、近年盛んに行われている博物館展示の政治学に関する研究も視野に入ってくるはずである。評者は、長い期間にわたって論文執筆者を指導する中で、何とか視野を広げて欲しいと、時々ヒントを出し

たが、十分な効果はなかったと言わざるをえない。論文執筆者が、まず「富田幸次郎」の人物像を描くことを目標とし、視野を広げることを頑なに拒んだことは指導教員としては残念ではあった。

もう一点、欠点を挙げるなら、富田幸次郎が英文で書いた数多くの論文を、論文執筆者は十分読みこなしておらず、その作業から明らかになると思われる富田幸次郎のアーキヴィストとしての見識や思想が十全に追及されていない点である。富田像を描くという本論文の狭い目標を満たす上で、せっかく作った著作リストをより十分に使いこなすべきだったろう。

しかしながら、以上の欠点は、論文執筆者が今後の課題として取り組むべきこととすべきである。非公開の資料を探し出し、読み、富田幸次郎の生涯と仕事をまとめあげたことは、博士号に十分値する努力、成果である。執筆者が視野を狭く取ったことが、限られた時間内に論文を仕上げる上で、功を奏したとも言えるのである。

#### 4. 最終試験の概要

本論文執筆者に対する最終試験は、2020年7月1日午後1時より、東京女子大学23101号教室においておよそ2時間にわたって行われた。出席者は、主査、副査全4名に加え、2名の研究生であった。コロナ下においてキャンパスが閉鎖中だったため、限られた聴衆しか集められないという事情があった。

最初に論文執筆者がパワーポイントを用いて、論文の概要を説明した。この際、論文には含まれていない何枚もの興味深い写真が紹介され、論文執筆者の資料渉猟の幅の広さが改めて示された。富田幸次郎の肖像など、その中のいくつかの写真は、論文本体に含むべきだったとの指摘がなされた。

次いで副査より順に、論文に対するコメントといくつかの質問がなされた。これまでその存在をほとんど知られていない富田幸次郎という人物について、興味深く読むことができたこと、また、発掘した一次資料は貴重なものであり、その使用は注意深くなされており、博士論文として十分な内容と体裁を備えている点については全員の意見が一致していた。

ただし、引用文に旧漢字と現代漢字の混在が見られるなど、一部一次資料の扱いに注意深さが足りないこと、添付資料は章ごとではなく、まとめて論文の後につけた方が見やすいことなど、形式上の問題点の指摘があった。また、質問は、どれも富田幸次郎を

より広い文脈に置いたらどう見えるかという命題に関わるものであった。たとえば、富田は「コスモポリタン」だと主張しているが、彼にとって日本人、アジア出身であることはどのような意味を持っていたか、富田にはアメリカで生きていく上での葛藤はなかったのかなどといった質問である。論文執筆者が今後の課題と認めたものもあったが、応答はおおむねよどみなく行われ、研究課題についての一定の理解が示された。

質疑の後、聴衆は退場し、主査、副査の前で論文執筆者がおよそ 20 分間、英語で論文内容の説明を行い、これを博士号取得要件である外国語（英語）の試験とした。当該外国語の十分な運用能力が示され、試験合格とした。